

〔研究ノート〕

小学校社会科学習の改善（2）

— 4年単元『美山町を通して過疎化を考える』の開発—

角田 将士*

小学校における社会科授業はいかにあるべきか。社会科は本来的には「Social Studies（社会研究）」のための教科であり、学校段階を限らず、小学校においてもその基本的性格は貫かれるべきである。しかし現状の小学校社会科の授業は、（産業等に従事している）人々の「工夫」や「努力」、「想い」や「願い」をキーワードとする、いわば「個人の側からのわかり方」に基づいた授業構成に焦点化するあまり、子どもに社会の現実を認識させにくいものになっている。本稿においては、小学校社会科授業を、社会的事象を客観的かつ冷静に見ることのできる眼を養うものへと改善していくことをめざし、実際に4年単元「美山町を通して過疎化を考える」を開発し、追試可能な授業計画書の形式で提示することを通して、「社会の側のわかり方」に基づいた授業構成のあり方を提案する。

キーワード：小学校社会科、社会の側からのわかり方、身近な地域の学習、過疎化

はじめに

今日、私たちを取り巻く社会状況は複雑化を増してきている。日常生活の中では、見えないところで私たちの生活を規定している社会の仕組みや構造を、より間違い少なく認識していくことはますます困難になってきている。そのような中で、社会に生きる子どもに対して、意図的・計画的に社会についての認識を育成することを主眼とする社会科教育の果たすべき役割は、ますます重要になってきているといえよう。

ところで、社会科の原点とは子どもが自ら「社会研究（Social Studies）」を行っていくところにある。それは子どもに社会を客観的かつ冷

静に見る眼を育てることでもある。しかし、現状の社会科教育、とりわけ小学校におけるそれは社会の現実を子どもに認識させにくいものになっている。

小学校社会科授業の抱えている課題とその原因、その改革の方向性については、別稿において検討を行い、それらを踏まえた上で、小学校社会科授業の望ましいあり方について、実際に第5学年で実践可能な単元「日本の酪農」を開発し、提案をしてきた¹⁾。しかし、そこで開発した単元は、第5学年、しかも「酪農」という限られた産業を対象としたものであった。小学校社会科授業全体の改善のためには、全学年、できればすべての単元について、授業を開発し、継続的に提案をしていく必要があろう。そのような見通しのもと、続く本稿においては、特に第3-4学年で行われる「身近な地域の学

* 立命館大学産業社会学部准教授

習」において実践可能な単元を開発し、教材解説図、授業計画書とともに提示する。

子どもにとって、小学校第3-4学年での学習は、その後の社会科学習の入り口としての意味合いをもっている。子どもにとっても取り組みやすい、身近な地域を素材とするこの段階の学習においてこそ、その後の基礎となる社会科学らしい学びを展開させたい。

一方で、自分が住んでいる市町村や都道府県などの身近な地域の学習は、日本の国土や産業を学習対象とする第5学年や、日本の歴史や日本国憲法を学習対象とする第6学年に比べて、学習者である子どもに対して「なぜそれを学ばなければならないのか」についての説明責任を果たすことが実は難しい。異論はあろうが、日本の地理や日本の歴史、現在の政治の仕組みについての学習は、国家・社会の形成者としての自覚や資質の基底をなす知識を獲得させるために不可欠である、との主張が可能だからである。それに対して、身近な地域の学習の場合には、コミュニティの形成者として、との主張も可能であるが、その場合、子どもが他の地域に行った場合にはその度に学習をやりなおす必要が生じてくる。そのため、第3-4学年の単元を開発する際には、特定の地域を学ぶことを通して、子どもが他地域に行った時にも適応可能な一般的な見方や考え方を育てることが求められるよう。

本稿においては、京都市の子どもが当該の学年において学ぶ内容のひとつである「山の多い南丹市美山町²⁾」を事例とした単元「美山町を通して過疎化を考える」を開発し、提示することを通して、上記の課題に迫ってみたい。

1 単元「美山町を通して過疎化を考える」の理論的枠組み

(1) 小学校社会科授業の現状と課題ー美山町の人たちの努力と工夫を知る：個人の側からのわかり方に基づく授業構成ー

「山の多い南丹市美山町」についての授業においては、通常、下記表1のような授業展開がなされることが想定される³⁾。

表1のような実践がなされるのは、平成10年版の学習指導要領及び同解説において、「県

表1 単元「山の多い南丹市美山町」の展開

	主な発問	獲得させたい知識
導入	・美山町の人々は自然を生かしてどのような暮らしをしているのだろう。	・美山町では自然の素材を生かしたかやぶきの家で暮らす人たちがいる。 ・美山町ならではの特産品を売っている。 ・一方で美山町の人口は減り続けており、地域を活性化しようがんばっている人たちがいる。
展開	・美山町の人たちは「町おこし」のためにどのような工夫や努力を行っていますか。 ・美山町の人たちはどのような想いや願いでこれらのことを行っているのだろう。 ・美山町で活躍している人たちのお話を聞いてみよう。	・美山町の自然を生かして都会から訪れる人を増やそうとしている（民宿やおみやげ屋の経営、交流館の設置など）。 ・「美山町を活気の溢れる地域にしたい」という地域の発展を想う願い。 ・美山町の人たちは「美山町をよくするためには何でもする」という気持ちでがんばっている。
終結	・学習の感想を美山町の人たちへの手紙の形で書いてみよう。	・美山町の将来のことを考えてがんばっているなんてすごいなあ…など。

（筆者作成。）

（都、道、府）内の特色ある産業や地形が見られる地域を取り上げ、そこで産業に携わったり生活したりしている人々の生活の様子を具体的に調べる」とされていたからであり、また、2008年3月に改訂された新学習指導要領及び同解説においても「『県（都、道、府）内の特色ある地域』としては、伝統的な工業などの地場産業の盛んな地域のほか、例えば、溪谷や森林、高原や湿原、河川や海辺などの豊かな自然を守りながら、あるいは歴史ある建造物や街並み、祭りなどの地域の伝統や文化を受け継ぎ保護・活用しながら、地域の人々が互いに協力して、特色あるまちづくりや観光などの産業の発展に努めている地域が考えられる」とされているからである⁴⁾。このような観点から、京都府においては南丹市美山町が教材として選択されている（きた）わけである。

上記のように、現状（改訂された新学習指導要領のもとでも）の小学校社会科授業の特質は、地域で活躍する人たちの「努力」や「工夫」、「想い」や「願い」に焦点化させた社会（地域）研究を行わせる点にある。このような授業構成は、社会に生きる個人の側の視点に寄り添い、そこから社会について認識させようとする、いわば「個人の側からのわかり方」に基づくものになっているといえる。小学校社会科授業（とりわけ第3-4学年におけるそれ）は、地域で活躍する人たちの行為やその背後にある願いを共感的に理解させることを通して、子どもに「自分たちもそうありたい」と思わせ、「地域社会に対する誇りと愛情」を持ち、地域の発展に尽くす人材へと成長するように促すことが指導の主眼となる。

しかし、上記のような「個人の側からのわかり方」に基づいた授業には、社会科授業として

大きな課題があるといえる⁴⁾。それは、人々の「想い」や「願い」に焦点化するあまり、学習の結果として、子どもが社会の現実を認識できにくくなっている点である。例えば、美山町の町おこしは、都市化の進展とともに押し寄せた過疎化の波に対抗しようとする取り組みである⁵⁾。人々の中には「美山町を活気溢れる地域にしたい」という気持ちが確かにあろうが、表1のような授業展開の中で、それを共感的に理解するところに学習が留まれば、過疎化に代表されるような美山町を取り巻く社会の様子は見えてこない。

さらに、表1のように展開される授業は、「なぜ美山町を学ばなければならないのか」といった点について、十分な説明責任が果たせないものになっている。確かに「地域に生活している人たちは自分たちが生活する地域のためにさまざまな努力や工夫をしている（だから自分たちもそうすべきだ）」という他地域にも適応可能な見方や考え方を獲得させているといえるのかもしれないが、それではあまりに常識的で短絡的な社会研究ではないか。

では、表1のような授業展開をどう改善していけば「社会科らしい」社会研究としての授業が実現できるのだろうか。

(2)単元開発の方向性—美山町を事例として「過疎化」を考える：社会の側からのわかり方に基づく授業構成—

美山町は、標高800-900メートル級の山々に囲まれた山間の町である。昭和30（1955）年の町村合併の際に5つの村が合併して美山町が成立した。町の面積の95%を占める山林とわずかな農地を利用した農林業を産業の中心として、人口は約1万人であった。しかし、高度経済成

長期の林業の衰退に伴い、全国の農山村と同じように美山町も急激に人口の減少が進んだ。昭和60（1985）年には、人口は半減し約6000人となった。この間に美山町の産業も変化し、その中心は、農林業を中心とした第一次産業から製造業を中心とした第二次産業へと移り、農林業の兼業化も進んできた。さらに、美山町は、平成18（2006）年1月1日に市町村合併により、南丹市の一行政区となった⁶⁾。

上記のような背景のもとで、美山町の人たちは地域を活性化させるための取組を行ってきている。しかしその一方で、様々な取組をしているにもかかわらず、美山町は過疎化の一途をたどってきており、財政的な問題もあって「合併」という形で問題の打開を図ろうとしている。その成否についてはこれから問われることになるが「人々が地域を活性化しようと懸命に努力をしているにもかかわらず合併が行われた」というのが近年の美山町の実態であるといえる。逆に言えば、過疎化という現実が認識できていなければ、美山町の人たちの行為の本当の意味は見えてこない。

社会の客観的で冷静な認識の形成をめざす社会科授業を実現していくためには「なぜそのような町おこしが必要になるのか」、「町おこしをしているにも関わらず、人口が減り続け、他の町と合併したのはなぜか」「合併の結果、問題は解消されたのか」といった具合に、その地域を取り巻く社会の現実に迫るような学習が求められる。つまり、人々の行為や願いに焦点化した「個人の側からのわかり方」だけに依拠するのではなく、それらを見えないところで規定する社会の仕組みや構造に目を向けさせる、「社会の側からのわかり方」に基づく授業構成が求められるわけである。

また、美山町に限らず、全国の農山村は総じて同じような状況の下にあるといえる。美山町を「事例」として、先にも述べたように、過疎化など、日本の農山村を取り巻く厳しい状況について考えさせる授業が展開できれば「なぜ美山町を学ぶのか」についての意義付けも可能になろう。さらに学習の中で、他地域との比較の視点などを取り入れることによって、「過疎化の影響を受けている農山村の中で美山町とは異なる対策をしている地域はあるのだろうか」、「なぜその地域ではそのような対策がなされているのだろうか」「過疎化への有効な対策とは何か」といった具合に子どもの中に次々と問いを生じさせることができれば、社会科授業はまさに社会研究の場となっていこう。

もちろん、小学校第3-4学年という子どもの発達段階を考慮すれば、これらを間違い少なく認識させることは困難である。しかし、目に見える具体的な美山町の人々の行為の背後には、目に見えない「過疎化（その要因としての都市化）」という社会的な現象が存在している、ということに気付かせることは可能であろう。小学校の場合、そもそも獲得させる学力は「未完」性を持っており、子どもは引き続き中学校でも社会科を学ぶ。過疎化の実情やその対策のあり方、市町村合併の是非などについては、中学校社会科の公民的分野や高等学校公民科の「現代社会」等で深く学んでいくことになる。このような小学校社会科授業における「未完の学力観」に基づき、開発する単元においては、以後の学習への発展していくような「知的な気付き」を培うことをめざしたい。

以上のような問題意識に基づき開発した単元「美山町を通して過疎化を考える」の授業計画書を教材解釈図とともに2で提示しよう。

2 4年単元「美山町を通して過疎化を考える」における教材解釈図

*美山町の人たちのねがい

- 美山町を多くの人に知ってもらいたい。（タテマエ的）
- 美山町に経済的な効果をもたらしたい。（ホンネ的）



美山町の工夫（事実的知識）

- ①宿泊施設の経営・交流館の建設
- ②有限会社の設立

（個人の側からのわかり方）

なぜそのような工夫をしているのか？

= 「町おこし」 をすることで
地域に活気を与える。

工夫の背後にある公式（説明的知識）

- ①「観光の目玉となる施設を作ることによって、観光客が増え、町に収益がもたらされる」（＝観光振興）
- ②「新しい会社を設立することで、働き口が確保されるので、町への転入が促され、人口が増加する」（＝定住促進）

（社会の側からのわかり方）

なぜそのような工夫が必要になるのか？

=美山町は過疎化しているため。

規定

- 高度経済成長期の農林業の衰退とともに、美山町の産業体系も転換が図られ、結果として若者たちは仕事を求めて都市へ流出した。
- 美山町の人口は減少し続けており、市町村が提供するサービスの水準を確保するためには、ある程度の人口の集積が求められる。

結果⇒美山町以外にも適応可能な見方

美山町の人たちが行っている「町おこし」によって、一時的な入町者は増えているものの、人口の増加にはつながらなかったため、その対策として近隣の自治体との市町村合併を行った。

3 4年単元「美山町を通して過疎化を考える」の授業計画書

(1)主題 小学校社会科 4年単元「美山町を通して過疎化を考える」

(2)単元の目標

- ① 人口が減少している美山町について、以下の事柄を説明できるようにする。
 - i 美山町の人たちが行っている「町おこし」のためのさまざまな工夫は、「美山町を多くの人に知ってもらいたい」という願いによって支えられているが、実際にはそのような取組によって、人口が減りつつある美山町に経済的な効果をもたらそうとするためのものである。
 - ii 過疎化は、産業構造の変化とともに、若者が都会へ出ていくことによって起こるが、その結果として、医療や福祉など、住民生活の基本的部分でのサービスの質の低下など、様々な問題が生じている。
 - iii 市町村が提供するサービスの水準を確保するためにはある程度の人口の集積が必要であり、そのため美山町は近隣の町（園部町、八木町、日吉町）と合併し、南丹市が発足した。
 - iv 日本全国で過疎化への対策として「町おこし」が行われているが、成功している例は少ない。
- ② 過疎化を学習する中で、人々の生活はその人の思いや願いを超えた社会の仕組みによって規定されていることに気づき、常に社会の側から社会事象について考えていくことのできる能力を身に付ける。
- ③ 美山町の過疎化について調べていく中で、社会事象を人々の想いや願いから対象化して、冷静に捉える態度を身に付ける。

(3)単元の全体構造（全3時間）

パート		主な発問	獲得させたい知識	時間
導入	問いの設定	○都会と比べて美山町での暮らしにはどんな特徴がありますか。 ◎美山町の人々は、町の人口が減っていることに対して、どんな工夫をしているのだろうか。	○豊かな自然を生かした暮らしをしている一方で、近年、町の人口は減ってきており、地域を活性化しようとがんばっている人々がいる。	一時間
	展開Ⅰ 「個人の側からの問いの探求①」 「個人の側からの問いの探求②」	○美山町の人々が行っている工夫にはどんな良い点がありますか。 ○美山町の人々は何のために工夫をしているのでしょうか。	○観光の目玉となる施設を作ったり、新しく会社を創設したりすることで、町を訪れる人や定住する人を増やすことができる。 ○「美山町を活気あふれる地域にしたい」という願いから様々な「町おこし」のための取組を行っている。	
展開Ⅱ		○様々な工夫をしているのにも関わらず、なぜ美山町の人口は減り続けているのでしょうか。 ○人口が減り、地域が高齢化するとどんな困った点がありますか。またそれを解消するためには何が必要なのだろうか。 ◎美山町の人々は何のために工夫をしているのだろうか。 ◎なぜ美山町は南丹市と合併したのだろうか。	○「町おこし」の取組によって、一時的な入町者が増えたとしても、町の人口の増加にはつながらない。また会社を作ったとしても、規模が小さければ、たくさんの若者が町で働くことはできない。その結果、若者が都市へ出ていくことは止められないし、地域の高齢化は進んでいる。 ○町に入るお金が減る一方で、医療や福祉のお金がたくさんかかる。そのため、人々の暮らしを守るためには、町に入るお金を増やす必要がある。 ◎人口が減り高齢者が増えてきている中で、美山町に経済的な効果をもたらすためのものである。 ◎「町おこし」の取組は人口の増加にはつながらなかったため、その対策として、近隣の園部町、八木町、日吉町と合併し「南丹市」となって行財政基盤の強化、合理化を図った。	一時間
発展		○美山町と同じような状況にある他の地域では、町の活性化のためにどんな取組をしていますか。またそれはうまくいっているのだろうか。 ◎過疎化に対する望ましい対策のあり方とはどのようなものなのでしょうか。	○例えば、広島県庄原市では、市民だけではなく市外の人々も交えたワークショップを開催することで町の魅力を新たに発見し発信する取組を行っているが、そもそも庄原市には集客力の高い観光資源が乏しいため、取組は苦戦している。	一時間

(4)単元の展開

	発問	教授学習活動	資料	獲得させたい知識
導入【問いの設定】	- これから学習する南丹市美山町は京都府の中でどのあたりにありますか。地図で確認しよう。そこはどんな地形ですか。 - 美山町の様子を写した写真、イラスト地図、地形図などを見て、美山町がどんなところか発表しよう。 - 美山町の人々はどのような暮らしをしているのだろう。 ○都会と比べて美山町での暮らしにはどんな特徴がありますか。 ◎美山町の人々は、町の人口が減っていることに対して、どんな工夫をしているのだろう。	T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：考える。	① ② ③ ④	- 南丹市美山町は、京都市の北、丹波高地という高い土地の中にあり、「京都府の屋根」とよばれる800-900メートルの高い山にまわりを囲まれている。 - 山が多い。 - 自然がいっぱいある。 - かやぶき屋根の家がある。 - スキーをしている人がいる。 - 川には魚がいっぱいそう。 - 京都市では見られないような、いろいろな施設がある。 - 美山町の川はきれいなので、たくさんの種類の魚が住んでおり、都会からやって来る釣り客を相手にお店を営んでいる。 - 自然の素材を生かしたかやぶき屋根の家に住んでいる。 - 美山町ならではの特産品を売っている。 ○豊かな自然を生かした暮らしをしている一方で、近年、町の人口は減ってきており、地域を活性化しようとがんばっている人々がいる。 ・調べてみないとわからない…。
展開Ⅰ【問いの探求①…個人の側からのわかり方】	- 美山町の人々は豊かな自然を生かしてどのような取組をしていますか。 ○美山町の人々が行っている工夫にはどんな良い点がありますか。 ○美山町の人々は何のために工夫をしているのでしょうか。	T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。	⑤⑥ ⑦	- 民宿、交流館などを作って、観光振興を図ることによって、町へやって来る人たちを増やそうとしている。 - 美山町の中でも特に北地区の人々が全員でお金を出し合って、有限会社「かやぶきの里」を作り、地区の後継者を育てるために、若い人たちが働けるようにしている。 ○観光の目玉となる施設を作ったり、新しく会社を創設したりすることで、町を訪れる人や定住する人を増やすことができる。 ○「美山町を活気あふれる地域にしたい」という願いから様々な「町おこし」のための取組を行っている。
展開Ⅱ【問いの探求②…社会の側からのわかり方】	「町おこし」を行うようになってからは美山町の人口はどのように変化してきましたか。 ○様々な工夫をしているのにも関わらず、なぜ美山町の人口は減り続けているのでしょうか。	T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。	④⑧ ⑨	- 美山町を訪れる人は年間72万人をこえるが、一時的な入町者に過ぎず、美山町の人口は減り続けている。 ○「町おこし」の取組によって、一時的な入町者が増えたとしても、町の人口の増加にはつながらない。また会社を作ったとしても、規模が小さければ、たくさんの若者が町で働くことはできない。その結果、若者が都市へ出ていくことは止められず、地域の高齢化は進んでいる。

展開Ⅱ	○人口が減り、地域が高齢化するとどんな困った点がありますか。またそれを解消するためには何が必要なのだろうか。 ◎美山町の人々は何のために工夫をしているのだろうか。 ◎なぜ美山町は南丹市と合併したのですか。	T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。	⑩ ○町に入るお金が減る一方で、医療や福祉のお金がたくさんかかる。そのため、人々の暮らしを守るためには、町に入るお金を増やす必要がある。 ◎人口が減り高齢者が増えてきている中で、美山町に経済的な効果（もうけ）をもたらすためのものである。 ⑪ ◎「町おこし」の取組は人口の増加にはつながらなかったで、その対策として、近隣の園部町、八木町、日吉町と合併し「南丹市」となって行財政基盤の強化、合理化を図った。
発展【問いの発展・深化】	○美山町と同じような状況にある他の地域では、町の活性化のためにどんな取組をしていますか。またそれはうまくいっているのだろうか。 ◎美山のような農山村において、人口が減り、地域の高齢化が進むことを「過疎化」と呼びますが、過疎化に対する望ましい対策のあり方とはどのようなものでしょうか。それを考えていくためにこれからどんなことを学ばなければなりません。考えてみましょう。	T：発問する。 P：資料をみて答える。 T：説明する。 T：発問する。 P：考え続ける。 (オープンエンド)	⑫ ○例えば、広島県庄原市では、市民だけではなく市外の人々も交えたワークショップを開催することで町の魅力を新たに発見し発信する取組を行っているが、そもそも庄原市には集客力の高い観光資源が乏しいため、取組は苦戦している。 ・そもそも美山のような農山村の若者たちはなぜ都会に出ていってしまったのだろうか。 ・なぜ日本全国の農山村で美山町と同じようなことが起きているのだろうか。 ・過疎化対策のために合併した地域においては、合併によって問題が本当に解決したのだろうか。また、その結果として新しく起きてきた問題はないのだろうか …など。

【授業資料】

- ①「京都府の地図」 京都市小学校社会科教育研究会編『社会科 京都の地図帳』教材研究所、2007年より。
- ②「かやぶき屋根の家」・「イラスト地図」・「地形図」 京都市小学校社会科教育研究会編『わたしたちの京都 3・4年下』教材研究所、2007年より。
- ③「美山町の暮らし」 京都市小学校社会科教育研究会編『わたしたちの京都 3・4年下』教材研究所、2007年より。
- ④「美山町の人口」 南丹市 HP <http://www.city.nantan.kyoto.jp/gaikyou/menu/gaikyou4.html> より。
- ⑤「美山町でのイベント情報」 美山ナビ HP <http://www.miyamanavi.net/> より。
- ⑥「かやぶきの里」 有限会社かやぶきの里 HP http://www.kayabukinosato.com/index_2.html より。
- ⑦「保存会の人たちのお話」 保存地区10周年記念行事実行委員会編『美山町北保存地区の歩み』2003年より。
- ⑧「美山町へ訪れる観光客」 国土交通省都市・地域整備局 まち再生事例データベース HP（事例096）
http://www.mlit.go.jp/crd/city/mint/htm_doc/db/096nantan.html より作成。
- ⑨「美山町の人口構成」 南丹市 HP <http://www.city.nantan.kyoto.jp/gaikyou/menu/gaikyou4.html> より。
- ⑩「過疎のお話」 全国過疎地域自立促進連盟 HP <http://www.kaso-net.or.jp/kaso-about.htm> より。
- ⑪「南丹市の誕生」 南丹市総合ガイド HP <http://tanbarakuichi.sakura.ne.jp/nantan/history/index.html> より。
- ⑫「広島県庄原市の取組」 国土交通省都市・地域整備局 まち再生事例データベース HP（事例118）
http://www.mlit.go.jp/crd/city/mint/htm_doc/db/118shoubara.html より。

おわりに

近年，授業計画を丹念にしすぎるから，教師が教室内の状況に応じた対応ができずに授業が硬直化する，という主張が盛んになされてきている⁷⁾。しかし，教師は丹念な教材研究と授業計画の立案を通して，授業の具体的なイメージを抱くことができるとともに，子どもが想定と違った反応を示した場合にも対応が可能になり，大きな混乱も起きないのではないか。ただし，本稿において提案した授業計画書については，そのまま授業で用いられることは想定していない。もちろん子どもの実態に合わせて資料や発問を工夫する必要がある。

教師は「こうすれば子どもによりよい認識が形成されるはずだ」という仮説に基づいて授業を構成している。それらの仮説は多くの場合，意識化されることはなく，結果として授業は教師の主観世界の中で構成されることになる。それに対して，「授業計画書」と「授業記録」の分析・検討によって授業のあり方を，もちろん部分的ではあるが，客観的に吟味することができよう。授業研究の手段として，詳細な授業計画書を欠くことはできないと考える。本稿はこのような基本的視座に基づくものである。

注

- 1) 拙稿「小学校社会科学習の改善（１）—『社会からのわかり方』に基づいた５年単元『日本の酪農』の開発—」広島大学大学院教育学研究科編『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）第53号，2005年，

pp.109-116，を参照。それに続く本稿は，小学校社会科の授業計画書シリーズの一部である。

- 2) 京都市小学校社会科教育研究会編『わたしたちの京都 ３・４年下』教材研究所，2007年，pp.73-76.
- 3) 上掲２，及び文部科学省『小学校学習指導要領社会編』東洋館出版社，2008年，p.118，を基に筆者が想定した。
- 4) このことについては，上掲１，または拙稿「『消えた学力』としての社会から見るわかり方の復権」『現代教育科学』No.573，明治図書，2004年６月，pp.80-83，を参照。
- 5) これについては上掲２（p.79）においても「南丹市役所美山支所の人のお話」として言及されているが「そのために村おこしの取組を行うようになりました」とだけ述べられているだけでそれ以上の考察はなされていない。
- 6) 南丹市『市勢要覧』を参照。
- 7) 社会科教育学の分野においては，佐長健司氏がそうした主張を展開してきている（佐長健司「社会科学習指導案の状況論的検討—プランの呪縛からの解放と状況への自由—」日本社会科教育学会第58回全国研究大会発表資料，2008年）。

主要参考文献

- 片上宗二『オープンエンド化による社会科授業の創造』明治図書，1995年。
- 授業を考える教育心理学者の会『いじめられた知識からのメッセージ』，北大路書房，1999年。
- 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書，1978年。

謝辞

本稿で提示した授業計画書は，筆者が立命館大学において担当している初等教職科目の中で受講生たちが作成したものをベースとしている。ここに記して感謝の意を表したい。

The Reform of Social Studies Learning in Elementary School (2)
— The Development of a Teaching Plan for
“Studies on Depopulation at MIYAMA” —

KAKUDA Masashi *

Abstract: The aim of this paper is to develop a teaching plan for an elementary school social studies lesson. The objective of this lesson is to make pupils understand the depopulation of MIYAMA (a village in Kyoto Prefecture) from an objective viewpoint. In this lesson, pupils analyze circumstances surrounding MIYAMA, that is, people have mapped out a plan to promote the economic development of the village, but its depopulation is continuing. Pupils also analyze examples of other areas, and consider future prospects.

Keywords: Social Studies for Elementary School, Objective View, Studies Local Areas, Depopulation

* Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University